『定番（ていばん）のデート』

作者　淺羽　一

耳元でいきなり響いたのは、目覚まし時計の音じゃなくて、携帯電話の着信音だった。
朝っぱらから、遠慮とか気遣いとかそう言う類のものからまるでかけ離れた高音の嵐に、反射的に飛び起きて携帯画面の表示を見る。
サユリだった。ぼんやりとした頭ながら、無視すると後々面倒なことになりそうだと直感した。
『…もしもし』
あからさまに不機嫌な声。せっかく気持ち良く眠っていたのに、文字通り鼓膜を叩き起こされて文句を言いたいのはこっちの方だと思ったものの、とりあえず穏やかな対応をしようと決めた。
どうした、何かあったか。と尋ねると、サユリはしばらくの間を置いてから、感情を押し殺した風な声で『…ちょっと、聞きたいんだけど』。
うん、どうぞ。と敢えて軽い口調で応えつつ、何を言い出すのだろうかと気を引き締めた。
『こないだ、部屋に上着を忘れていったでしょ』
そう言えば、そんなこともあった気がする。
『で、昨夜、アイロンでも掛けてあげようと思ったんだけど……映画、誰と行ったの』
……一瞬、固まった。するとサユリはその隙を逃さず、立て続けに質問を繰り出してきた。
『映画館の半券がポケットから出てきてさ。タイトルを見たら、あんまり一人じゃ行かない内容っぽいし。あ、友達？でも、男同士で恋愛映画って、ねぇ…。時間帯が夜だし、夕食の後で寄ったとか。けど、それだと、ご飯も一緒に行ったってことよねぇ。何かさ、まるでデートの定番って感じだよね』
妙に優しげな口調で、けれど冷え切った声音が、鼓膜に刺さる。あたかも細いアイスピックで肌の表面をちくりちくりとされているみたいだった。つまり、その気になればいつでも刺せるんだぞ、と。
これは寝惚けている場合ではない。とにかく深呼吸をして意識をはっきりさせると、携帯電話をしっかり持って、こう告げた。
誰って、お前と見に行っただろ。
果たして、サユリの返事はなかった。こちらもまた、向こうからの発言があるまで、もう何かを言うつもりはなかった。
しばらく、沈黙が流れた。
焦らなかった。そもそも、嘘を吐いているわけでもないのだ。具体的なタイトル名をサユリは言わなかったが、それが何であれ、彼女と一緒に見に行った事実に間違いなど無い。
先に言葉を発したのは、やはりサユリだった。
『…ごめん』
先ほどまでとは全くと言っていいほど異なる響きに、そんなはずもないのだけれど、急に電話相手が変わったのかと思った。
さらに待っていると、気まずそうながらもサユリはぽつぽつと話し出した。
『エリカに、朝一で電話してこんな質問をしたら、相手の反応で浮気を確かめられるって言われて…』

何とまぁえげつないことを勧めるものだと、怒りを通り越して呆れてしまった。ちなみに、エリカとはサユリと同じくお嬢様で、小学校以来の親友だ。決して悪い子ではないのだが、時折、実家を離れて一人暮らしを始めたばかりの親友を気遣うあまり、無用な心配をしてこちらの関係に余計な波風を立ててくれる。

彼女と俺と、一体どっちを信じてるんだよ。

乱暴でないが少しばかり硬い口調で言うと、サユリはまたしても『…ごめん』。

正直、もうちょっとくらい叱ってやっても良かったのだろうけれど、結局、俺は深い溜息を一つ吐いてから、もう良いよ、と言った。サユリの気持ちは分かったから、それに、こっちこそ不安にさせたのならごめんな、と。

案の定、彼女は心底から反省してくれたようで、『本当に、ごめんなさい。多分、ちょっと寂しかったんだと思う』。

確かに、最近は色々と予定が立て込んでいて、あまり構ってやれていなかった。だとすれば、つまらない作り話には笑えないが、彼女ばかりを責めるのは気の毒だ。そこで俺は、普段通りの会話を意識して、今夜当たり久しぶりに食事でも行くか、と言った。

サユリは嬉しそうに、『うん』と応えてきた。『じゃあ、私、店を予約しておくね。パパの友達がお店を始めたんだけど、結構人気があるらしいんだ』。

そしてサユリは雑誌でもたびたび紹介される高級レストランの店名を口にした。勿論、こちらに異存などあるはずもなく、すんなりとデートの約束は決まった。

電話を切る寸前、『大好き』と聞こえてきた声はとても可愛らしいもので、俺もまたいつも通り『愛してるよ』と自然に言った。

「…で、解決？」

と、電話を切った直後、唐突に傍らから発せられた声に視線を向ければ、シーツから顔を覗かせたチサコが呆れた表情を浮かべていた。どうやら、起こしてしまっていたらしい。

「もう、まだ朝の六時過ぎよ。睡眠時間、三時間もないじゃない」

悪いな、と苦笑しつつも、心の中でずっと存在感を消してくれていたことに感謝する。だから頭の良い女は好きなのだ。良すぎる女は面倒だけれど。

「本当に、あんたって悪人よね。世間知らずのお嬢様を騙して、酷い男」

全くもって心外だった。なぜなら、サユリに嘘など吐いていないし、彼女を愛していることも間違いない。ただ、彼女以外にも愛している女がいるというだけで。

そう言うとチサコは軽く鼻を鳴らして、「まぁ、どっちでも良いけど」と言いながら、僅かに胸元のシーツを持ち上げた。「寝直すには、ちょっと目が冴えちゃったから。軽く運動でもする？」。

ほんの束の間、どうしようかと考えたものの、シーツの隙間から仰向けになっても形の崩れない胸が覗いて、それも良いかと頷いた。どうせ、この胸ともしばらくお別れなのだし。決してお金持ちではないけれど、俺は俺で色々と忙しい身分なのだ。

そうして俺は携帯電話を枕元に置いて、チサコの上に覆い被さり…。

…と、そこでふと気になったことがあって、聞いてみた。

最近さ、俺達、映画とか行ったっけ。

すると彼女はそんなことどうでも良いじゃないと言いたげな目をしつつも、「先週に、行ったでしょ」。

それって、夜だったかな。
「何言ってんの。昼まで寝てて、それから行ったのよ」
あぁ…。そう言われると、そうだった気もする。
「本当に、最低な男よね。私の他にも一体どれだけの女がいるのかしら」
呆れた顔をするチサコに、そっちこそ、同じ映画を何回も見に行く苦労が分かるのかよ、と言いたくなったが、賢明にも黙っておいた。

〈了〉